

21世紀の土木に向けて — 共生の基礎理論を求めて —

京都大学名誉教授 長尾義三

時代は大きく変革している。人間復興（ルネサンス）が16世紀、自然科学が生まれ育ち始めたのが18世紀。人間を意識して、未知なる自然（環境）探求の道を歩んできたのであるが、いまだ到達するところを知らない。

自然は征服され得るがまだ残っているものがあるとしてさらに挑戦しようとしているもの。そのような意識から脱却して自然の一部となろうとするもの、またそれを超えて、地球と人間とが共生して持続性のある発展の道を新たに見いだそうとするものが混在する時代となっているようである。

新と旧。静と動。保守と革新。対立抗争と協調融合といつの時代でも見られる構図ではあるが、規模もその内容も今まで全く経験したことのない時代の渦中にある。

一口に境界領域の学問といっても自分達の築いてきた小さな縄張りを外すことができなければ他の学問の壁を破り融合した新しい学問を築くことはできない。

仏教では「無」とか「空」の境地と言うそうだが、シビルエンジニアリングは無の学問なのかもしれない。大鳥圭介の学問に対する所信に対し、初代土木学会会長古市公威の反論は貴い。どちらも正論と思う。白か黒かではなく止揚して共生するところにこの工学の特徴がある。

シビルエンジニアリングのコンセプトを時代時代に即応して明確にし、新しい学問が生まれる素地を造ることは必要なことである。その場合、物理、化学系のみでなく生物系、人文系の基礎学問の理解力を培い共生の理論を求める学問の府を築くことが望まれていると思う。